

仙台大学 広報室

Monthly Report

中国・瀋陽師範大学との国際交流促進に関する合意書に調印



合意書に調印後、固く握手を交わす賈副書記（左）と阿部学長＝仙台大学

平成27年10月29日（木）、仙台大学と中国・瀋陽師範大学は、平成20年5月21日に締結した「仙台大学と瀋陽師範大学との間における国際交流に関する協定書」に基づき、両大学間の国際交流をさらに促進するため、新たに「学部学生の相互交流および教職員の交流」の具体的な取組項目について合意書を交わしました。

調印式には、本学の阿部芳吉学長・齋藤浩二現代武道学科長・荒井龍弥国際交流センター長や瀋陽師範大学の賈王明副書記ら14名が出席。阿部学長と賈副書記がそれぞれ合意書に署名し、両大学の交流をさらに活性化させることを確認しました。

賈副書記は「瀋陽師範大学は仙台大学との友好関係を大切にしている。両大学の学部学生の相互交流と教職員の交流が一層進むことを期待している」と話され、阿部学長は「9月14日から2週間、本学の学生2名が瀋陽師範大学でお世話になった。学生は一回りも二回りも人間性が大きくなって帰ってきたように感じる。両大学の学生たちのために、瀋陽師範大学と手を結んで、努力しながら精一杯教育していきたい」と応じました。

< 目 次 >

| | |
|-------------------------------|----|
| 中国・瀋陽師範大学との国際交流促進に関する合意書に調印 | 1 |
| 大学アスリートサポートシステムシンポジウム開催される | 3 |
| 宮城県食生活改善推進員協議会仙南ブロック交流会in仙台大学 | 4 |
| 2015東北こども博を開催—子どもたちの笑顔でいっぱい | 6 |
| Japan Welcomes our Students! | 9 |
| 学生の競技結果 | 10 |

学生の活躍や、取り組みをご存知でしたら
広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室

TEL 0224-55-1802

FAX 0224-57-2769

Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り

"A campus for Sports Education through English"
—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017 SENDAI Since 1967
UNIVERSITY

SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に～

中国瀋陽師範大学短期研修



2015年9月14日～27日に中国瀋陽師範大学における短期研修が行われ、現代武道学科3年生の橋本太輔、高橋紗彩の2名が参加しました。引率教職員は、馬佳濛講師が全日程、斎藤浩二教授、金賢植講師、福原可奈氏が前半、そして朴澤泰治理事長、近江康宏課長が後半という分担での引率参加でした。

本短期研修は、27年度文部科学省奨学金（JASSO）補助の採択を受けて、初めて実施されたものです。プログラムについては、現代武道学科が開講している「中国武術Ⅰ」「中国武術Ⅱ」授業のアドバンスコースとして、本場での中国武術の習得を主な目的に、中国語、京劇、中国伝統民族楽器鑑賞、中国茶道などの多彩な文化体験によって構成されています。

中国武術の習得に関しては、一般学生と共に太極拳の授業を受講し、24式太極拳を熟練した上、一般の学生とも交流を図りました。また、毎年本学での「中国武術」集中講義の担当講師でもある瀋陽師範大学体育科学術院の王強先生が実施した特別授業では、橋本太輔さんが棒術、高橋紗彩さんが剣術という中国伝統武術の種目を紹介され、たった2週間という短期間で、基礎的な型を習得することができました。



最終日の修了式において、担当教員および体育科学術院院長から高い評価を得るとともに、「今後も中国武術を続けて、武術を通じた日本と中国のかけ橋になってほしい」との期待の意が示され、修了書を授与されました。また、瀋陽師範大学武術チームおよび瀋陽市体育学校武術チームのパフォーマンスを見学し、中国武術を本場で見るだけでなく実施することで、より理解を深め、中国武術の真の精神と技能に触れることができました。

学生2人は、研修滞在中、瀋陽師範大学国際教育学院の留学生寮に宿泊し、20数ヶ国からの計850名の留学生とともに中国語および各種の文化体験授業を受け、寮生活をしました。普段の授業から日常生活まで、他の国から来た留学生と意欲的に中国語でコミュニケーションを取り、友情を築きました。



また、中国語のリスニングやライティングなどの授業では、初級レベルでありながら、同クラスの留学生に励まされ、懸命に追いつき、2週間の受講を経て、自己紹介と簡単な会話を聞き取ることができるようになりました。さらに、京劇と伝統民族楽器の鑑賞、作法や考え方が日本と異なる茶道と書道の体験を通じ、中国文化を精神的にも身体的にも感じ取ることができました。また、学外の見学では、清の時代を統治した皇帝の初期の宮廷である瀋陽故宫博物院や、日本軍による満州事変の発端となった柳条湖事件以降の中国侵略の歴史を集めた9.18記念館なども見学し、学生にとっては、忘れられない経験になりました。



修了式では、橋本太輔さんは「研修を通して教職員の方や学生達の対応が良く、これまで抱いていた中国のイメージが良い方に変わった。また、進路の選択肢の一つとして、瀋陽師範大学で国費留学生という長期留学も考えていきたい。」、高橋紗彩さんは「2週間、大変、楽しく過ごした。今後も機会があればまた来たい。そして、歴史について再認識し、非常に勉強になった」と、ともに熱く感想を述べました。今回参加した2名の学生にとって良い経験と刺激になり、学んだことを生かして、将来に役立ててもらうことを願っております。

瀋陽師範大学と仙台大学とは、これまで、大学院留学生との交換留学、教職員間の交流等を行ってきましたが、今回の学部生の短期研修派遣は初めてであり、今後も本プログラムを継続すると同時に、「海外武道実習」の実施や中長期の単位交換留学制度の実現等にも向けて、さらに交流を拡充していく予定であります。

<報告：研修担当・講師 馬佳濛>

大学アスリートサポートシステムシンポジウム開催される



松浪理事長挨拶

10月3日、日本体育大学世田谷記念講堂において、「大学におけるアスリートサポートの現状とその展開」と題して、医科学サポートを中心とした各大学の取組みに関するシンポジウムが開催され、本学からは、鈴木省三副学長が「仙台大学のアスリートサポートについて」の講演を行った。

シンポジウムの冒頭、日本体育大学の松浪健四郎理事長から、「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、日本体育大学は70名の日本代表を輩出することを目標とする。そのためにはサポート体制の整備強化が必要であり、本日の実のある発表に期待したい」との挨拶がなされ、先ず、国立スポーツ科学センターの川原 貴センター長から、「国立スポーツ科学センターにおける医・科学サポート」と題して、日本におけるスポーツに対する医科学サポートの歴史と現状について、分かりやすく解説がなされた後、日本体育大学(西山哲成氏)、東海大学(有賀誠司氏)、国際武道大学(山本利春氏)の医科学サポートの取組みの各状況について、説明講演がなされた。

サポートの態様としては、トレーニング・サポート、メディカル(AT、S&C等)・サポート、パフォーマンス(情報等)分析・サポート、心理サポートなどの医科学サポートの他、教育サポート、研究サポート、財政サポート等、広い視点からの



日体大のNASSバンフ

取組みがなされており、医科学サポートのうちの心理サポート、および、教育サポートという取組みは、本学のサポート体制としては未成熟な分野であり、学生教育の質の充実という観点からも早急な体制整備が必要であることを示していた。

日本体育大学の「医科学サポートは人間教育の有効な手段」、「体を張った管理栄養士」等、東海大学の「内部資金なし、委託研究など外部資金の獲得」、「活動状況の保護者への開示」、「勉強会重視」、「データ・ファイルの共用」、「地域住民への関連学内資格の付与制度」等、国際武道大学の「ATは体育的臨床であり教育である」等の各事例紹介は、本学としても取組むべき方向性を示唆している。

今回聴講においては、川原センター長の講演内容をビデオ収録しており、内容が学生の知識蓄積分野として必須の事項であることから、学内の屋外スクリーンでの放映により、学生に情報提供したいと考えている。

<報告：理事長 朴澤 泰治>

陸上競技部・加藤由希子選手(健康福祉学科4年)が壮行会で抱負



世界選手権に向け「2位以内を目指したい」と抱負を語る加藤選手

10月7日(水)、本学管理研究棟2階大会議室において、10月22日から10月31日まで開催される「IPC2015陸上競技世界選手権大会」(カタール・ドーハ)の女子やり投げに出場する本学陸上競技部・加藤由希子選手(健康福祉学科4年一宮城・気仙沼女子高校出身)の壮行会が行なわれました。本学の教職員約30名が出席。

壮行会では、阿部芳吉学長から「自己ベストの更新を期待している」。陸上競技部の藤井邦夫部長からは「次につながる活躍を期待している。壮行会を開催して下さり、感謝している」と激励と感謝の言葉が述べられ、その後、大学・保護者会・同窓会から加藤選手に激励金が手渡されました。

激励を受けた加藤選手は「今大会で2位以内に入るとリオデジャネイロパラリンピックの出場権を得ることができます。最大限の力を出して、よい報告ができるように頑張りますので、

応援よろしくお願ひします。本日は壮行会を開催して頂き、ありがとうございました」と抱負と感謝の言葉を述べました。

宮城県食生活改善推進員協議会仙南ブロック交流会in仙台大学



橋本副学長の講演の様子=仙台大学第五体育館

10月6日(火)、本学第五体育館で「平成27年度宮城県食生活改善推進員仙南ブロック交流会」が開催されました。仙南ブロック2市7町の食生活改善推進員(※地域における健康づくりと食育のアドバイザー(ボランティア))約130名が集い、本学の橋本実副学長からは「地域で支える健康づくり～健康寿命の延伸に向けて～」と題する講演を行ないました。

講演の冒頭、柴田町の滝口茂町長から「健康づくりには、バランスの摂れた食事・適度な運動・十分な睡眠が大事。正しい情報を伝え、地域の健康づくりの担い手として活躍してほしい」。本学の阿部芳吉学長からは「食を通じて健康で元気な人を増やし、地域に貢献してほしい。実りある交流会にしてほしい」と歓迎の挨拶が述べられました。

講演では、橋本副学長から「100歳以上まで生きるための秘訣」、「糖質摂取で太る理由」、「糖質制限の方

法」、等が紹介されました。橋本副学長は「炭水化物は、血糖値を急上昇させる性質をもっている。これが、血管を傷つけ、老化を早め、動脈硬化や糖尿病を引き起こしている」と話され、「何を」「どれだけ」食べたら良いのかを理解することの重要性を強調しました。講演後の質疑応答では、食生活改善推進員から牛乳・卵・酒に関する質問がなされましたが、橋本副学長の回答に納得した様子で頷かれていました。

引き続き、本学の柳澤麻里子新助手から「地域で実践できる軽運動・体操」と題して、いつまでも自分の脚で歩けるように無理なく行なえる軽運動・体操の実演指導が行なわれました。

「幸せなら手をたたこう」を歌いながら、手を叩いたり、足踏みしたり、食生活改善推進員同士で触れ合ったりしながら楽しく体を動かしました。



足踏みを実演指導する柳澤新助手

最後に、仙南2市7町(白石市・角田市・蔵王町・七ヶ宿町・柴田町・大河原町・村田町・川崎町・丸森町)の食生活改善推進員から「私たちの食を通じた健康づくり活動」と題した活動発表が行なわれ、活発な議論が交わされました。

宮城県食生活改善推進員協議会仙南ブロック交流会は、参加者の皆様から好評を博し、盛会裏に終了しました。

平成27年度 東北多文化アカデミー主催・日本語学校開講式



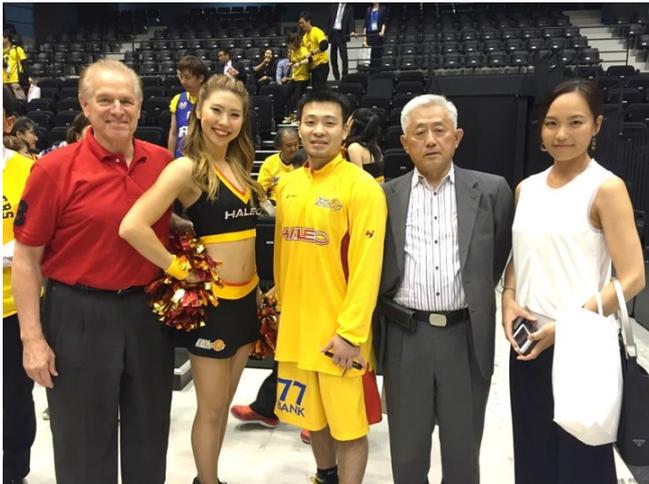
10月14日、次年度大学院入学予定である台湾・中国の留学生が仙台市青葉区で行われました、東北多文化アカデミー主催の日本語学校の開講式に参加しました。

入学者は先月来日した中国の瀋陽師範大学、上海体育学院と台湾の台東大学からの5名の留学生です。

留学生の中の大半が日本での生活は初めてであり、まだまだ慣れていない様子で、辺りを物珍しく見渡し、様々な物に対してカメラを向けている場面が多く見られました。開講式では、これからの新しい場所での生活を心待ちにしているのが伝わるような輝いた目で、同席された朴澤理事長や東北多文化アカデミーの方々の挨拶を聞いていました。また、覚えてたで片言ではありましたが、しっかりと日本語で先生方に自己紹介を披露し、終始和やかな雰囲気ですべてを終えることができました。今後、日本語能力がどこまでレベルアップするのか、彼らの頑張り期待したいものです。



仙台89ERS・2015-2016シーズンTKbjリーグ開幕戦を観戦



左からキナーナト副学長、鈴木保之香さん、佐藤文哉選手、朴澤理事長、白坂

2015-2016シーズンTKbjリーグが開幕しました。TKbjリーグはこれが最終シーズンとなり、次シーズンから日本のバスケットボールリーグが統一され、新しく『Bリーグ』として始まります。仙台89ERSはBリーグI部で戦うことが決まっております、TKbjリーグ最後のシーズンに悲願の優勝を果たすことを目標としています。

平成27年10月10日、ゼビオアリーナあすと長町にて行われたホーム開幕戦にご招待いただき、朴澤理事長先生、キナーナト副学長と観戦させていただきました。満席の会場の3階席に案内され、食事や飲み物が用意されており、会食を通して他スポンサー企業様との交流を持つことができました。理事長先生は七十七銀行頭取の氏家氏、株式会社藤崎専務取締役の田中氏とご交流を持たれておりました。

私としましても株式会社ボディープラスインターナショナル社長ホルトン氏を始め、たくさんの方々との交流を持つことができました。対戦相手は東京サンレーヴスで、108-58と大きく突き放したダブルスコアゲームとなり、ホーム開幕戦をより一層盛り上げる大勝となりました。佐藤文哉選手は得意のスリーポイントを3本沈め、合計12得点という活躍でした。試合終了後にはスポンサー企業と選手との交流会もあり、朴澤理事長は佐藤選手とチアリーダーの鈴木保之香さんとお話をされていました。佐藤選手には活躍を讃え、また、「もっとアピールをしなくては」と激励されていました。今シーズンのロスターの特徴は日本人選手の補強であると見受けられます。経験も実力もある日本人選手に囲まれ、佐藤選手がさらなる成長をし、数多くの試合で活躍することを期待しています。また、今シーズンは仙台出身の選手も増え、地元に関わったチーム作りにも期待しています。

仙台89ERSを離れて3シーズン目が始まりましたが、今年度も元チームメイトをサポートできる環境にいられることを朴澤理事長先生に感謝申し上げます。

<報告：新助手 白坂広子>

第一回スポーツ情報サポート研究会活動報告会が開催される



活動報告会の様子＝講義棟B103教室

10月13日（火）、本学講義棟B103教室において、「第一回スポーツ情報サポート研究会活動報告会」が開催され、学生や関係教職員ら合わせて約40名の聴講者が集まりました。スポーツ情報サポート研究会は今年4月に設立。同研究会の活動目的は、スポーツに関する様々な「情報」を有効に活用できる実践力を身に付けること。情報戦略系とマスメディア系の2つに分かれて、それぞれ活動が行なわれ、「情報戦略系」では、

主に特別強化指定サークルになっている一部の部活動を対象として、ダートフィッシュやスポーツコードを使って分析サポートが行なわれています。「マスメディア系」では、本学が行なう学内外の様々な取組やサークル活動、地域イベント等の取材・撮影・編集を行ない、主に第三体育館の大型スクリーンによる情報発信が行なわれています。

報告会の冒頭、スポーツ情報マスメディア学科の高橋弘彦学科長から「映像がなければ分析はできない。情報戦略系とマスメディア系の融合が重要。これまで取り組んできた成果発表を楽しみにしている」と挨拶され、発表が開始されました。

発表者たちは真剣な表情で発表に臨み、事前に準備したパワーポイントで活動の成果を示しながら発表しました。また、発表後の質疑応答でも活発な議論が交わされました。

発表会の最後に阿部芳吉学長から「仙台大学らしい素晴らしい発表会で感動した。新しい分析の視点で「情報」に対する考えを確立してほしい。情報分析による価値ある提言や情報発信を期待している」とエールが送られ、発表会が締めくくられました。

2015東北こども博を開催—子どもたちの笑顔でいっぱい



子どもたちと一緒に大人気の「ようかい体操第二」を踊る学生ボランティア
=仙台大学第二体育館

10月12日（日）・13日（祝・月）の二日間、「震災からの復興」と「子どもたちの笑顔」をテーマに、「2015東北こども博」（主催：東北こども博実行委員会、後援：文部科学省／宮城県／仙台市教育委員会など）が本学を会場として開催され、約17,700人の方々がご来場下さいました。

今回で5回目を迎えた「東北こども博」は、子どもたちに、遊んで、からだを動かし、元気になってもらおうと全国の玩具メーカーや地元企業約60社が協賛。アンパンマンやウルトラマンエックスなどのキャラクターによるステージショー、最新の玩具やアクセ

サリーを作る体験などができる「Toy Hobby」、サッカーや野球などの競技に挑戦できる「スポーツ」、グルメ屋台などが並ぶ「お祭り」、復興市場（女川のサンマやカキ・亘理のはらこめしなどが出店）や（公財）音楽の力による復興センター・東北が「音のおもちゃ箱♪」と題したミニコンサートなど「ふるさと（地域連携企画）」の4つのエリアから構成された多彩な催しが行なわれ、各会場は大人も子どもも夢中になって楽しんでいました。

約400名の学生ボランティアが二日間に渡り「東北こども博」を支え、盛り上げました。Toy Hobby広場でプラバンアクセサリー作りを体験していた仙台市立柳生小学校6年の女子児童は、「昨年が続いて家族4人でこども博に来ました。大学生が優しく教えてくれ、オリジナルのプラバンアクセサリーができました」。ふるさと広場で紙ヒコーキ作りを体験していた名取市立増田小学校3年の男子児童は、「こども博は毎年楽しみな行事です。（折り紙ヒコーキ協会会長の戸田拓夫さん：紙ヒコーキ室内滞空時間ギネス世界記録保持者から）よく飛ぶ紙ヒコーキの織り方を教えてもらえて嬉しかったです」と語ってくれました。

ソチ五輪ボブスレー日本代表・黒岩俊喜選手が講演in大河原小学校



大河原小学校で講演する黒岩選手

10月20日（火）、大河原小学校（全校生徒848人）でソチ五輪に出場したボブスレーの黒岩俊喜選手（運動栄養学科4年—神奈川・橘高校出身）の講演会が行なわれました。黒岩選手は、夢を持つことの素晴らしさや、困難に立ち向かい努力し続けることの大切さを児童たちに伝えました。

黒岩選手はオリンピックについて、競技だけでなく、国際理解・国際交流も魅力の一つと強調。自分の小学校時代に触れ、「テニスや陸上で精一杯取り組んだ結果が良い方向に進んでいった」と振り返りました。また、自らの経験談を交えながら、夢を叶えるための3つの心構えについて「夢や目標を持って努力すること、感謝すること、自分を好きになることが大切」と呼び掛けました。

講演会終了後、黒岩選手は児童代表から「黒岩さんの生き方を通して、頑張ること、挑戦することの素晴らしさを学びました。次のオリンピックも頑張ってください」とお礼の言葉と花束が贈呈されました。

なお、講演会は本学と大河原小学校の連携事業による一環として、同小学校が企画しました。



平成27年度前期海外留学研修報告会および後期留学生交流会



国際交流センター主催の前期海外留学研修報告会が10月20日（火）、学生食堂「なちゅら」において開催され、教職員・学生・留学生など約60名が参加しました。

会のはじめに阿部芳吉学長から「日本の良さは海外に行くことにより再認識することができる。今後も世界に視野を広げながら頑張ってもらいたい」とあいさつされました。報告会ではハワイ大学アスレティックトレーニング研修アドバンスコース、フィンランドカヤニ応用科学大学長期交換留学、そして、協定締結後初めての派遣となった中国瀋陽師範大学中国武術・文化研修派遣の3つのプログラムの報告が行われました。

報告の中で学生からは、「日本では体験できないことができ、今後勉強を進めるうえで参考になった」「海外に行って視野が広がった」「留学経験を活かせる職業に就きたい」という声が聞かれ、有意義な留学研修が行われたことが伺えました。

報告会終了後には中国、台湾、ベトナム、ドイツからの留学生と本学学生との交流会も開催され、留学生全員の日本語での自己紹介や、中国に留学した学生による中国武術の演武が披露されるなど、終始和やかな雰囲気です。



荒井龍弥国際交流センター長は「留学を経験した学生はその経験を大学生活に生かしてほしい。また、留学生の皆さんも仙台大学で多くのことを経験してください」と締めくくりました。

後期も様々な留学研修プログラムが予定されており、本学の国際交流がますます活発化していくことが期待されます。

<報告：事業戦略室 石森靖明>

船岡さくら商店街「スマイルロード・プログラム」に本学学生が参加



10月28日（水）に「船岡さくら商店街「スマイルロード・プログラム」」が実施されました。本学からは吉田事務局長、川村学生課長をはじめ、女子バスケットボール部の菅野コーチと部員10名が参加し、船岡さくら商店街会員の皆様とともに街路の清掃と花木の植栽を行いました。街路の清掃や花木の植栽中には、地域の方々から「お疲れ様」「ありがとうね」といったお言葉を多くかけていただき、交流を深めながら取り組んでいました。

スマイルロード・プログラムに参加した女子バスケットボール部の関畑希さん（せきはた・のぞみ）（健康福祉学科4年一岩手・一関学院高等学校出身）は、「地域の方々から多くの声をかけていただき、柴田町・船岡の温かさを改めて実感しました。今回の経験は部活動や社会に出てからも活かせると思うので、今後も地域に貢献できる活動をしていきたい」と充実した表情で話してくれました。



船岡さくら商店街「スマイルロード・プログラム」とは

宮城県の支援を受け、良好な道路環境をつくるため、定期的に清掃や緑化活動を行い、もって地域環境の維持向上と道路通行安全確保を通し、民間と行政のパートナーシップの構築と住民参加のまちづくりを図ることを目的とする。

<報告：新助手 溝上 拓志>

元桜美林大学大学院教授 船戸高樹先生との懇親会が開催されました



10月26日（月）、船戸高樹先生（本学客員教授／山梨学院大学教育・学習開発センター顧問／元桜美林大学大学院教授）が来仙され、桜美林大学大学院の船戸研究室に在籍していた本学事務職員との交流を図りました。

船戸先生と本学との繋がりは、平成13年に日本私立大学協会主催の米国大学経営戦略視察団に朴澤理事長が参加された際に、船戸先生からレクチャーを受けたのが始まり。

その後、桜美林大学が大学事務職員を対象とした大学運営に関する通信制大学院を開設（桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科）。船戸先生もその教授陣の一員となりました。本学事務職員がSDの一環

として、船戸先生からご指導を受ける運びとなりました。

船戸先生には、第1期生である番匠入試創職室長を始め、中鉢入試創職担当課長、岡沼会計課長、渡辺広報室担当課長、庄子教務課長、三浦入試創職室担当課長、吉田茂予算管理課担当課長、杉本入試創職室担当課長、伊東教務課担当課長、第6期生として最後に薊（大学院事務室担当課長）がご指導頂きました。この流れは、現在も継続しており、毎年1・2名の本学事務職員が桜美林大学大学院に入学して研究を行なっております。

現在、中小規模私立大学のなかで修士の学位を保有する事務職員の比率は、本学が全国有数であると思われまます。

当日は、厳しい修論指導の思い出話の他にも、船戸先生主催のアメリカ研修でのハプニングなどの話して盛り上がり、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

今後も大学院在籍時の気持ちを忘れずに、大学発展のために船戸先生にご指導頂きながら、事務職員としての業務を遂行していく所存であります。

<報告：大学院事務室 薊 正展>

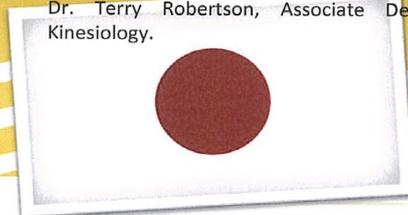
Japan Welcomes our Students!

GRADUATE PROGRAM IN SPORT MANAGEMENT

FALL 2015

Japan Welcomes our Students!

The Graduate Program in Sport Management sent a group of seven students from LT 27 and LT 28 to Sendai this summer to participate in a study abroad program. The group of students had a fantastic time experiencing Japan's sport industry, food and people! Those on the trip included: Shane de Moree, Kyndall Freer, Jess Lo, Leonsio Magana, Chelsea Heyward, Trisha Kiss, Alexandra Cervantes and their chaperone Dr. Terry Robertson, Associate Dean of Kinesiology.

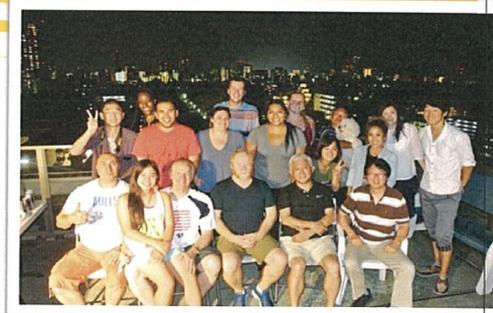


The inside scoop from Leo Magana:

"Going to Japan has been one of the best experiences I've had. It was a great pleasure to attend games such as the baseball club Rakuten Eagles and the soccer club Vegalta Sendai. Before attending the games, we were able to meet executives from the clubs where they talked about how the sport industry runs and the different challenges they face in Japan. One of the most enjoyable parts of the trip was the hospitality of the Japanese.

Staff and students all welcomed us with open arms and were always willing to help make the trip an unforgettable experience. The trip to Japan was without a doubt a highlight of the program and I would recommend it to anyone. The experience of being in another part of the world learning about sports and their culture, it's simply the best."
- Leo Magana, LT 27

Thanks Leo for filling us in!



【概略】

仙台大学が提携しているカリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）の大学院から、スポーツマネージメントを学ぶ7名の大学院生と彼らの引率としてキネシオロジー学部の副学部長であるテリー・ロバートソン氏が来訪し、7月19日～7月30日まで本学で学びました。その様子がスポーツマネージメントプログラムの2015秋号として同大学院のHPで紹介されました。

今年で3回目となる同大学院生の本学の訪問は「お習字」など日本文化を体験しつつ「SENDAI 89ERS」・「楽天」・「ベガルタ」を見学し、日本におけるプロスポーツがビジネスとしてどのように成り立って行くかを実践的に学ぶ非常に充実した内容として、毎回好評を得ています。

参加者の1人であるレオ・マグナさんは「日本・仙台大学におけるこの研修に参加することは、私の人生において最高の体験の1つとなりました。楽天やベガルタの試合を観戦する前に私達はそれぞれのチームの経営者レベルの方々に会い、プロスポーツを彼らがどのように運営し、日本においては異国と違うどういったチャレンジをしているのか、非常に価値あるお話を聞くことができました。また、ホスピタリティに満ち、きめ細やかな日本の心を象徴するおもてなしの数々は、何より胸を打たれるものでした。仙台大学の関係者や学生達は、両手を広げて私達を歓待し、決して忘れぬ体験を積み重ねられるよう終始温かく手を差し伸べてくれ、この研修が大学院で学ぶプログラムのハイライトであることは疑う予知がありません。他国の文化とスポーツを体験できる短期留学は、何より素晴らしく、是非参加するよう大学院生全員に勧めたいと思います」と語っています。

熊原健人投手(体育学科4年)が横浜DeNAから2位指名 —仙台大学から初のプロ野球選手誕生！



高橋部長(左端)・森本監督(右端)と固く手を握り合う熊原投手=仙台大学

10月22日(木)、2015プロ野球ドラフト会議において、本学硬式野球部の熊原健人投手(体育学科4年=宮城・柴田高校出身)が横浜DeNAベイスターズからドラフト2位指名を受けました。仙台大学から初のプロ野球選手が誕生しました。熊原投手は、3年春に34年ぶりのリーグ優勝に貢献。3年秋の東北学院大学戦でノーヒットノーランを達成。全国大会には3年春(ベスト8)、4年春(1回戦)の全日本選手権に出演。2014年大学野球日本代表。2014年21U日本代表に選ばれるなどの活躍を見せました。

大学内の記者会見場には、テレビ局・新聞社など約80名のマスコミ関係者が取材に訪れました。熊原投手は、硬式野球部の高橋義夫部長・森本吉謙監督と共に、テレビで生中継されているドラフト会議の進行を見守りました。

横浜DeNAから指名を受けると、直ちにその場で記者会見が行なわれました。熊原投手は記者からの質問に対し、「ドキドキしました。素直に嬉しいです。仙台大学第一号のプロ野球選手になれて光栄。大学入学後に、体重は20kg増えました。仙台大学の素晴らしい環境とトレーナーのお陰です」「自分の持ち味は投げっぷり。プロの選手相手にインコースを強気に投げていきたいです。プロ野球の世界は厳しいですが、長く記憶に残る選手になりたいです」と今後に向けての決意を表明しました。



記者会見終了後には、本学硬式野球部約150名のチームメイトによる熊原投手を祝福する胴上げが行なわれました。引き続き、熊原投手への熱い応援をよろしくお願い致します。

記者会見終了後には、本学硬式野球部約150名のチームメイトによる熊原投手を祝福する胴上げが行なわれました。引き続き、熊原投手への熱い応援をよろしくお願い致します。

<阿部芳吉学長のコメント>

横浜DeNAベイスターズから2位指名を受け、大変嬉しく存じます。本学のプロ野球選手第一号として、なるべく早く一軍で活躍してほしいと願っています。これまで熊原投手を育てて下さった方々に心から感謝申し上げます。

熊原健人投手(体育学科4年)に横浜DeNAからドラフト指名あいさつ



左から武居スカウト・吉田スカウト部長・熊原投手・阿部学長・森本監督・高橋部長=仙台大学

10月28日(水)、プロ野球ドラフト会議において本学硬式野球部の熊原健人投手(体育学科4年=宮城・柴田高校出身)をドラフト2位指名した横浜DeNAベイスターズの吉田孝司スカウト部長と武居邦夫スカウトが、熊原投手・阿部芳吉

学長・高橋義夫部長・森本吉謙監督へ指名あいさつに来校されました。熊原投手は、吉田スカウト部長からDeNAのラミネス新監督の直筆サイン入りカードとDeNAの帽子をプレゼントされました。

吉田スカウト部長は「熊原投手の体全体を使ったダイナミックで躍動感ある投球フォームは、元阪神の村山実さんを彷彿させる迫力がある。即戦力として期待している」と評価の言葉を述べられました。

熊原投手は「プロは大学生に比べて2段階レベルが高く、自分はまだまだ力が足りないところがたくさんあると自覚しています。一年目から一軍で投げられるように、これからの時間を大切にしていきたいです」と一年目からの活躍を誓いました。

阿部学長は「早く一軍で活躍する姿が見たい。体を壊さないように気をつけ、息の長い投手になってほしい」と熊原投手を激励しました。

熊原投手は今後、メディカルチェック・仮契約を経て11月28日(土)に横浜スタジアムで開催されるファン感謝デーで正式にお披露目される予定です。

全日本大学女子駅伝東北学連選抜 —伊藤玲奈主将(4年)「2年分の思いを込めて」



10月25日(日)、宮城県仙台市で「第33回杜の都 全日本大学女子駅伝」が開催され、参加26チームが仙台市陸上競技場から仙台市役所前広場までの6区間38.0kmを駆け抜けました。本学陸上競技部からは、東北学連選抜(オープン参加)の主将として伊藤玲奈選手(体育学科4年—宮城・明成高校出身)がアンカーを務め、第6区(5.2km)を19分39秒(区間24位)のタイムで走り切りました。

東北学連選抜は2時間19分17秒(オープン参加の為、公式順位はつかず)で25位という結果でした。レース当日は気温が低く、強風が吹き、時には雨も混じるコンディションの中でのレースでした。

昨年に続き東北学連選抜に選出された伊藤主将は、レース後に「個人として納得のいく走りは出来ませんが、駅伝を楽しみながら走ることが出来ました。」と振り返りました。

「去年は補欠で出場することが出来なかった分、2年分の思いも込めながら走りました。仙台大学の関係者をはじめ沿道で手を振って下さる方々、皆さんの応援が力になりました。来年は、後輩達にもぜひこの舞台を体験してほしいです。」とエールを送りました。



レース後に笑顔を見せる伊藤主将

<報告: スポーツ情報マスメディア学科3年・
陸上競技部 横山剛士>

今野杏夏選手(体育学科1年)が「第1回アジア空道カップ大会」 初代チャンピオンに輝く



写真: 本人提供

10月4日にモンゴルのウランバートルで開催された「第1回アジア空道カップ大会」において、本学の今野杏夏選手(いまの・きょうか)(体育学科1年—仙台第三高校出身)が初代チャンピオンに輝きました。

空道は日本(宮城)発祥の総合武道。大道塾が作り上げた安全性と実戦性の両立を目指した競技であり、打撃技・投げ技・寝技が認められた打撃系総合武道です。

今野選手は「3年後の世界大会は、東京で開催されます。そこで優勝することが、大学生としての最終目標です」と力強く今後の抱負を語りました。

PROFILE

今野 杏夏(いまの きょうか) / 第1回アジア空道アップ大会初代チャンピオン



1996(平成8)年7月23日生まれ。宮城県多賀城市出身。163cm/67kg。血液型O型。小学校5年で空道を始め、高校2年時に「全日本空道ジュニア選手権大会U19優勝」・高校3年時に「第1回世界空道ジュニア選手権大会 優勝」・大学1年時に「2015北斗旗全日本空道体力別選手権大会 初出場初優勝」。そして今回、「第1回アジア空道カップ大会」で優勝を果たす。日本空道界を代表する選手。

陸上競技部、佐々木琢磨選手が「第8回アジア太平洋ろうあ者競技大会」の100mで金メダル獲得



金メダルを手に笑顔を見せる佐々木選手（中央）＝台湾・台北

10月4日に台湾の台北で開催された「第8回アジア太平洋ろうあ者競技大会」の100mにおいて、本学陸上競技部の佐々木琢磨選手（ささき・たくま）（健康福祉学科4年一岩手・盛岡聴覚支援学校出身）が金メダルを獲得しました。

佐々木選手は、両側内耳性難聴による聴覚障害者2級のろうあ者。佐々木選手は「2017デフリンピック（トルコ・アンカラ）で世界一を目指す」とさらなる飛躍を誓いました。

PROFILE

佐々木 琢磨（ささき たくま）／第8回アジア太平洋ろうあ者競技大会の100mで優勝



1993（平成5）年11月30日生まれ。青森県五戸市出身。167cm／66kg。血液型B型。青森県立八戸聾学校中等部から陸上を始め、岩手県立盛岡聴覚支援学校高等部3年時に「全国ろうあ者体育大会」の100m・200m・4×100mで三冠を達成。大学2年時に「第22回夏季ソフィアデフリンピック」の200mと4×100mに日本代表として出場。大学4年時に「第12回日本聴覚障害者大会」の100mと200mの2種目で3年ぶりに自己ベストを更新（100m：10秒88／200m：22秒51）して優勝。そして今回、「第8回アジア太平洋ろうあ者競技大会」の100mで優勝を果たす。